

# カリフォルニアの農業

## —とくに果樹農業について—

金子晶子

カリフォルニアは恵まれた自然条件の下に開発当初から東部および西部の市場向けの商業的農業が展開し、年産50億ドルをあげる合衆国第一の農業州である。各農業部門が多様に発展する中で最も適作で産地形成の進んでいる果樹農業を取り上げ、その地域的動向と問題点を、「アグリビジネス」の観点も考慮し、主要果樹部門別に考察することを目的とした。当談話会では、今春の地理学会での「カリフォルニアにおける果樹農業の動向」を骨子に内容は次の通りとした。1.カリフォルニアにおける農業概観 2.カリフォルニアの果樹生産地域 3.ぶどう栽培の動向 4.オレンジ栽培の動向 5.アーモンド・くるみ栽培の動向 6.カリフォルニア果樹農業の実態と問題点

カリフォルニアの果樹栽培は、州中央に南北にのびるセントラル・ヴァレーを中心に温暖な南部カリフォルニアにかけて行なわれ、栽培果樹、自然条件、農業経営から、ここに6果樹地域を設定した。

果樹部門別に地域的動向を概観すると、〔ぶどう〕は州農業収益で第3位、栽培面積55万エーカーを占め、最も卓越している。用途からレーズン・ワイン・生食用と3別され、そのシェアは順に45、42、17%と加工用ぶどうに重点がおかれ、殊に近年は、従来のレーズン中心からワインへの指向が著しく注目される。分布状況からは、セントラル・ヴァレーでのフレズノのレーズンを核とした同心円構造を示す主産地と海岸部のワイン専業の副産地がみられ、経営面からも、前者はgrowerが生産・加工・販売を一貫する大規模なアグリビジネス形態、後者は小規模な観光醸造の形態をとり、明瞭な地域差をもつ産地形成が指摘される。

〔オレンジ〕栽培は、旧核心地南部カリフォルニアと新興産地サンノーキン・ヴァレーの2地域に集中し、前者は4～11月収穫のヴァレンシア種、後者は冬収穫のネーブル種に特色づけられる。オレンジも、サンキストに代表されるアグリビジネス形態をとっているが、栽培核心地が南部カリフォルニアであったことから、都市化の影響が大きく、主産地の北進現象、更に第一の生産州フロリダとの競合、州内での2品種間の競合等、多くの問題を包含している。

〔アーモンド〕はオレンジの栽培面積を凌駕し、主産地サンノーキン・ヴァレーを中心に近年の伸

びの目ざましい部門で、生産者、取扱業者、農務者三者によるマーケティング・システムが確立し、典型的なアグリビジネス形態に基く今後の伸びが期待される。

以上、カリフォルニア果樹農業は、大規模なアグリビジネスを主軸に、果樹部門毎に地域差をもつ主産地形成を進めてきたのである。（5月18日）

## 江戸の都市的土地利用

正井泰夫

1973年3月に筆者が作成した「江戸の都市的土地利用図（1：20,000）」を分析してみると次のようなことが分かった。

1860年頃の江戸の市街地は、行政区画（朱引き）とは無関係に、かなり広く拡大していた。しかし、主として徒歩交通によっていたため、中心からの拡大度はそれほど大きくなく、街道筋の宿場町（衛星都市的機能をもっていた品川・内藤新宿・板橋・千住の宿場町）を除くと、江戸城から半径6kmの範囲にほとんどの市街地が納っていた。これは時間距離にして1時間半程度の距離であり、人間の生理的許容範囲と考えられる現代の通勤圏半径（時間距離にして約1時間半）とほぼ同じである。

市街地の総面積は約80 km<sup>2</sup>にも達しており、その中に少くとも130万、あるいは200万近い大人口が居住していたといわれる。130万（統計による江戸の人口は、江戸時代末期で130万とされている）とすると、市街地人口密度は1 km<sup>2</sup>当り16,000人であるが、200万とすると25,000人となる。明治初期の日本の一般の町の市街地人口密度が1 km<sup>2</sup>当り20,000人を越していたことや、江戸への過度の人口集中が常に問題になっていたことから考えると、人口密度は25,000人という方が妥当性をもつ。従って、大江戸の人口は200万程度であったと考えた方がよい。

市街地内では、土地利用区分がきわめてはっきりとしていた。広い武家地と狭い町屋が極めて対照的であった。武家地は、城・幕府用地・大名上屋敷・大名中屋敷・大名下屋敷・一般武家屋敷などに分けられ、それぞれが特有の分布形態をとっていた。上屋敷は内側に、中屋敷は南寄りの中間地帯に、下屋敷は市街地周辺部に立地するのが一般的傾向であった。